

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：37102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730777

研究課題名(和文) 奉安殿をめぐる学校と地域社会の連携に関する研究 学校化社会の形成過程

研究課題名(英文) Formation process social the study on cooperation school in the school and the community around the HOANDEN

研究代表者

佐喜本 愛 (SAKIMOTO, AI)

九州産業大学・国際文化学部・講師

研究者番号：90552216

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：福岡県(北部)の小学校における奉安殿の建設および解体に関して、福岡県立図書館、市立図書館、直方市立図書館、大分県立図書館(公文書館)、国立国会図書館等での調査を行い、行政文書および小学校関係史料(学校保存文書、小学校年史、沿革史、百年史、同窓会誌、アルバム)の収集を行った。また、当該地方に現存する奉安殿の実態を把握するため、現地調査を実施し、奉安殿の「一部」が残されていることを明らかにした。これらにより、これまでの奉安殿研究で明らかにされてきた御真影・教育勅語を「奉護」とは別次元において奉安殿の教育史的意義を明らかにできた。

研究成果の概要(英文)：About the construction of the Shrine in the elementary school of Fukuoka (the northern part) and the dismantling, I performed an investigation in Fukuoka Prefectural library, municipal library, Nogata municipal library, quite prefectural library (Archives Building), National Diet Library and collected an administration document and elementary school relations historical materials (school preservation document, history of elementary school age, history of history, the 100 years history, alumni bulletin, album)I carried out a field work to grasp the actual situation of the Shrine which existed in the district concerned and made clear that "a part" of the Shrine was left.I was able to clarify education historic significance of the Shrine in a dimension different from "HOUGO" in an Imperial portrait, the Imperial Rescript on Education that these had revealed in a past Shrine study.

研究分野：日本教育史

キーワード：奉安殿 小学校 モノ 地域

1. 研究開始当初の背景

近代日本の学校の史的特質に関する研究成果により、「国民」形成の装置としての使命を帯びた小学校には、地域社会と相互関係で成り立つという基本的性格が備わっていたことが明らかにされてきた〔佐藤秀夫『教育の文化史 学校教育の構造』(2004年)、坂本紀子『明治前期の小学校と地域社会』(2003年)〕。しかし、そのような地域社会との相互関係が成立すれば、実りある教育活動の展開が保障されるわけではない。更なる検討課題として、そのように教育の組織化がなされていく中で、人々が何を思い、どう行動したのかという具体的な追及が挙げられよう。

これまでの教育史学において「子ども」の不在がとくに指摘されてきたが、子どもに限らず、小学校という舞台上で登場してくる地域に住む人々の動きそのものを分析の対象とした研究は、方法論的にも未開拓であった。こうした課題に対して申請者は、明治中期に小学校に導入された兵式体操の教材である「木銃」の整備・使用の実態を明らかにすることを通して、学校と地域社会が連携していく初期段階の構造を明らかにして博士論文にまとめた(「木銃の社会史-小学校における表象と国民形成-」)。ただし、木銃という教材(モノ)から学校と地域社会の連携を分析した視点・方法は、問題を多角的に検討する上で貴重であったが、兵式体操という教科の性質上、明治後期までしか分析できず、学校化社会形成のプロセスを長期的に分析する別の対象が求められる。

そこで本研究では、戦前の教育の象徴である「奉安殿」の建設・維持・解体という一連の作業の分析を通じて、学校行政の直接的な関係者(教師と子ども)のみならず、地域の人々(競争意識に駆り立てられて奉安殿を寄付した有力者たち)、さらにはその購買促進を企図した建設業者などが互いにどのような関係を築いたのかに注目し、異なる立場に立つ複数の関係者(ステークホルダー)の動きそのものにダイレクトに迫るような手法を取り扱いたいと考え、申請を行い研究を進めた。

2. 研究の目的

本研究の期間内の目標は、北部九州(福岡県、大分県)の小学校文書と地域史料を用いて次のことを明らかにする点にある。

(1) 奉安殿建設に至る具体的プロセスを解明する(1930年代): 各学校が地域住民に対して、いつ、どのように働きかけたのか、地域住民はいかなる行動を取ったのか(寄付金額、形態)、児童の関わり方を具体的に明らかにする。

(2) 奉安殿維持の実態解明を行う: 『教育勅語』と御真影の保管という重要な意味が

持たされていた奉安殿は、建設後もその扱いには注意が図られていた。掃除の在り方といった具体的な維持方法、そして修理や更なる改良の具体的な様相を明らかにする。

(3) 奉安殿解体の実態を明らかにする(1945年以降): 第二次世界大戦後GHQの指示により解体が命じられたが現在でも一部が残されているケースも多い。本研究では、当該地域における奉安殿の残され方(部分的解体、神社などへの再利用)の実態を明らかにする。

(4) モノとしての奉安殿の実態解明奉安殿の形態(大きさ・材質・デザイン)と建設・維持・解体に要した費用を解明する。建築学の知見に学びながら学校と建築業界の関係を具体的に解明する。

3. 研究の方法

申請時には次のような計画と方法を掲げた。

[研究方法] これまで天皇制イデオロギーとの関連で分析されてきた奉安殿研究に、学校と地域住民そして産業界の連携という具体的な人々の行動を紐解く観点を取り入れる。具体的に次の4点である。学校関係 地域共同体 建築業者に関する史料調査および実態解明につとめ、それをさらに補完するべく 各小学校の年史類(沿革史、百年史、同窓会誌)の史料調査および分析を行う。

学校文書の史料調査および実態解明学校行政、教員および児童の奉安殿との関わりを解明すべく、学校関係者と連絡を密にとりながら、第一次史料である学校文書(『校務日誌』、『拝査日記』、アルバム)の収集と奉安殿に関する残存物がある場合は必ず撮影を行い、それらを分析する。

地域共同体の史料調査および実態解明奉安殿建設に関わった当該地域の行政および地域の有力者の実態を明らかにするための史料調査を県立・市立・町立図書館において行う。さらに奉安殿(の一部)が神社等に残存していることが予測されるため、関連情報を上記機関で確認し、現地訪問を実施し撮影を行い、分析する。

建築業者の史料調査および実態解明奉安殿建設に関わった建築業界の調査にも着手する。当該地域の建築業の実態調査について地元新聞や一般雑誌および教育雑誌に掲載されている広告などを手がかりとしながら関係史料の収集を県・市・町立図書館において行う。

各小学校の年史（沿革史、百年史、同窓会誌）の史料調査および分析当該地域に存在した小学校が刊行している年史類（沿革史、百年史、同窓会誌）をすべて確認し、関連する記事、回想の収集、分析を行う。すべての小学校が史料を保存しているわけではない現状を考えると各学校の年史類に掲載されている回想や写真類は当時の日常的な実践を細かく知り得る数少ない史料である。その際、奉安殿に関する感慨そのものではなく、あくまで事実述懐を抽出する。ただし、年史類の多くは県立・市立図書館に寄贈されていないケースが多々あるため、地元の町立・村立図書館をくまなく調査する必要がある。一方で、国立図書館にのみ寄贈してある場合もあるので、東京への調査も不可欠である。

[年次計画] 1年目は奉安殿に関する基本史料の再検討を行いながら、福岡県（筑豊・筑後地方）に地域を限定して各小学校の史料収集、分析を行う。2年目以降は上記地域の史料悉皆調査につとめつつ、さらに筑後方面と地域的に関連のある大分県日田市もフィールドに加え、3年間において学校化社会形成の全体像を明らかにする。

4. 研究成果

研究計画に基づき研究を進めた。しかし、当初予定していた小学校（史料所蔵）の都合により史料調査を実施することが事実上困難になったため、本課題期間においては全体像を明らかにしたとは言いがたい。しかし、その中で（1）各小学校の年史（沿革史、百年史、同窓会誌）の史料調査および分析当該地域に存在した小学校が刊行している年史類（沿革史、百年史、同窓会誌）をすべて確認し、関連する記事、回想の収集、分析すること（2）地域の有力者の実態を明らかにするための史料調査を県立・市立・町立図書館において行い、奉安殿（の一部）が神社等に残存していることが予測される地区の現地訪問を実施において成果を得られた。

（1）については、まず、福岡県立図書館、福岡市立図書館、北九州市立図書館、直方市立図書館、飯塚市立飯塚図書館、飯塚市立庄内図書館、飯塚市立ちくほ図書館、飯塚市立穂波図書館、遠賀町立図書館、粕屋町立図書館、大分県立図書館（公文書館）等の図書館を回り、それら所蔵の各小学校の年史（沿革史、百年史、同窓会誌）をくまなく確認した。その際、目録にはあるが現物が無いものも多々あり、それらの確認は国立国会図書館所蔵資料を活用し、閲覧、複写して収集することができた。年史類は従来一次史料として積極的に用いられることはあまりなかったが、その中には奉安殿設置時期の事実のみなら

ず、特に第一次世界大戦後の奉安殿の処理に関する具体的な実態の解明に書かせない情報が記載されており、1945年「国家神道、神社神道二関スル政府ノ保証支援保全及監督並公布ノ禁止ニ関スル件」に始まる福岡県の戦後の奉安殿の取り扱いに対する各小学校の対応が確認出来る。たとえば、仁田原小学校（明治11年創立）では2月17日に県より指令を受けて3月4日から「奉安殿取除作業」を開始し、3月22日に作業終了したことが明らかにされた。すべての学校に当時の校務日誌が残されているわけではない実情において、こうした奉安殿をめぐる各小学校の具体的な対応状況を知るすべはこうした年史ということになる。

本課題期間においては、こうした観点からそれら年史類の収集と記載確認に力を注ぎ、これら収集した福岡県（北部）における小学校年史の全体像の把握、それらに記載があった奉安殿に関する記載の確認、そしてそれら年史記載の写真からその形態（デザイン）を確認し、奉安殿リストを作成することができた。

（2）については（1）で収集し、分析した中で記載のあった現存する奉安殿の現地調査を行った。特に本課題に関わって注目すべき事例としては、福岡県直方市立下境小学校の事例がある。同校では1928年に校舎内奉安室に代わる奉安殿を同年11月に建設している。『下境校史』（下境記念誌編集委員会/1973年）の回想録には近くの須賀神社に移転したことが記されており、今回調査をおこなった。同神社によれば同小学校の奉安殿は一つ一つ分解されて境内に運びこまれ、再度組み立て工事が行われ移転が終了した。しかし、2004（平成16）年の台風により崩壊し、現在では「門」だけが残されていることが明らかになった（「奉安殿に関する一考察」『九州産業大学国際文化学部紀要』、査読無、第51号、2012年、p189-198）。こうした事例の他、台座のみ、当時奉安殿を取り囲んでいたという壁の一部というパターンもあった。こうした本課題期間中に明らかにした調査で「奉安殿」の位置づけが読み取れる。つまり、建造物としての奉安殿は現存しないが、現在でもその一部が残されている事実は、関係者にとって奉安殿とは、御真影、教育勅語を保管するという本来の機能、目的とは何ら関係のない「モノ」も含めて意味を為していたということである。これまで天皇制イデオロギーとの関連で分析されてきた奉安殿研究とは明らかに異なる位相であり、本課題の最大の成果だといえよう。

上述のように、当初予定した小学校での学校文書調査は十分に行うことができなかったが、三年目以降は特に大分県公文書館所蔵の奉安殿関係史料の閲覧、複写して収集することができた。日田尋常高等小学校『校務日

誌』内の「拝査日誌」、「建築一件(昭和2年)」、「大分郡内小学校の増建築、雨天体操場、御真影奉安殿の建築」、「昭和3年大野郡内の小学校建築や御真影奉安殿の建築」、「建築一件(昭和6年)小学校御真影奉安殿建築認可」の収集、復刻作業を行った。それら行政文書から奉安殿建築に関わる費用や建築期間等の具体的な様子が確認できる。各小学校ほぼ同額規模の奉安殿建設が計画されていたこと、しかし、寄付者が集まらずに資金繰りに難をもった小学校があったことなどが明らかになった。また、そのデザインについても神社様式のものが多い確認出来るものの、それに統一されているわけではなく、その設置場所についても各学校の事情に合わせて考案されている。

本課題期間中において、奉安殿に関して校務日誌などの学校文書以外からの情報源としての小学校年史の史料収集が進んだことが成果である。上述したようにすべての学校において校務日誌が残されているとは限らない現状において、そして、関係者が「必要」と判断して記載する奉安殿に関する「語り」の中に人々にとっての「奉安殿像」をよい取ることができる点で重要な史料として位置付くからである。

また、書類上は「撤去」となっているものの、「一部」が未だに残されている事実の確認も従来になかった発見であろう。年史の記述の中には、御真影・教育勅語を奉護する機能は十分満たしているにもかかわらずそれを「一部完成」としたり、さらに装飾していく段階を確認出来るものもあった。それらは本課題期間中にまとめられた小野雅章氏の研究(『御真影と学校 - 「奉護」の変容』(東京大学出版会、2014年)にいう「奉護」を目的とする論理とは別次元の奉安殿の実態である。

今後は、今回なしえなかった関係地区の学校文書調査を進めることを第一としながら、地元紙、教育会雑誌等にまで分析対象を広げさらに構造化すること、また、今回の方法を福岡南部地方へ拡大しながら、福岡県における奉安殿という「モノ」を通して具体化される学校化社会の全体像に迫る作業を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

佐喜本愛「奉安殿に関する一考察」『九州産業大学国際文化学部紀要』、査読無、第51号、2012年、p189-198

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐喜本 愛 (AI SAKIMOTO)

九州産業大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：90552216

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし